

世界最強の
公爵様は娘が
可愛くて仕方ない

猫乃真鶴 Nekono Mazuru

ill. 結川カズノ

The world's strongest
duke absolutely adore
his daughter.

人物紹介

マクスウェル

王太子で
レイナードの従兄。
公爵家が起こす
騒動の後始末を
常に押し付けられる
苦勞人。

レイナード・ ヴァーミリオン

ヴァーミリオン家嫡男。
父同様に妹を溺愛しており、
リリアンへの無礼を
働く者には容赦がない。

アルベルト・ ヴァーミリオン

本作の主人公で、
ヴァーミリオン家当主。
娘のリリアンを天使と崇め、
彼女のためなら権力や魔法を
惜みず行使する。

セレスト・ アズール

アズール公爵家令嬢。
自分を差し置いて婚約者を
執心させるリリアンに、
猛烈に嫉妬している。

リリアン・ ヴァーミリオン

アルベルトの愛娘。
銀髪碧眼の美少女で、
周囲に天使と称される。
父や兄の過剰な溺愛を
時に窘めるしっかり者。

「娘が絨毯が綺麗と言ったので――」

トウイリアース王国王都、ミリール。王城を取り囲むように広がる貴族街、その西の端に、広大な庭を持った立派な屋敷がある。

装飾の見事な門扉は見上げるほどに大きく、この屋敷の持ち主の権威を象徴するかのようであつた。

それもそのはず、ここは王国の五大公爵家のひとつ、ヴァーミリオン家の別邸――タウンハウスである。

見事な装飾の外壁を持つ屋敷は、内部もこれまた立派で、そこかしこに配された美術品の類いが見事なシャンドリアの放つ光で輝いていた。

その長い廊下を、足早に進む男の姿がある。

シャンドリアに照らされ、月光のような白ささえ湛える彼こそ、ヴァーミリオン家当代当主、アルベルト・ヴァーミリオンその人である。

体格に合った衣服はぴしりと糊が利いており、皺ひとつない。磨かれた革靴が同じく磨かれた大

理石を打ち、いずれもアルベルトに良く似合っていた。

ただ、廊下に溢れる美術品も、びったり合う衣類も、彼の存在の前では霞んで見える。

すっと通った鼻筋。その両隣に配された切れ長の目は長い睫毛に縁取られており、その豊かな睫毛は奥の碧眼を隠してさえいる。

形の良い唇はしっかりと閉じられているが、それがより一層、整った顔立ちを強調しているかのようだ。

そして何よりも美しいのは、その頭髮。回廊の中にあっても輝く銀の髪。

それら全てを兼ね備えたアルベルトは、すれ違えば、まず間違いなく目で追ってしまうほどの美貌の持ち主である。

歳の頃は三十代半ばにも見えるが、彼の本来の年齢は、ひと回り上だ。アルベルトは人並み外れた魔力量により、若々しい肉体を保っていた。

魔力を持つているのは、この国では王族とそれに血を連ねる者だけ。

貴族の中にも魔力を保有している者はいるが、実際に魔法を使うことができる者は限られている。魔力を動力に、術式を組むことで魔法は発動するが、それには本人の適性と素質が大きく影響するだけでなく、技術と知識が必要になるためだ。

中でもずば抜けて能力が高いのが、このアルベルトだ。彼は魔力量が桁違いで多く、確認されて

いる火・水・土・風の四属性全てに適性を持っている。

ひとつの属性に適性があるのが普通で、複数の属性に適性があるのは非常に稀なことだ。

また、アルベルトは研究の十分ではなかった術式の組み方をまとめたことで、『歴代最高の魔導士』と言われるようになった。

そんなアルベルトは足早に先を急ぎ、後ろに続く従者の存在など微塵も意識していない。

蒼い双眸はただ前を向いていて、その先にある目的のもの以外を認識していなかった。

やがてアルベルトは、目的地の扉の前までやってくると、ドアノブに手をかけようとしたところではっとし、おもむろに襟を正す。次いで、さっと髪も掻き上げた。

さつき整えたばかりなのに、改めて身だしなみを整える様子に、従者が呆れた顔で息をひとつ吐く。

身なりを整えたアルベルトは、ようやく扉を開ける。かちやりと微かな音を立てて開く扉の向この部屋は、陽光が差していて明るい。

その中でも、特に強く光を返すものがある。

アルベルトは目の前の眩い輝きに、目を細めて笑いかけた。

「リリアン、準備はできたか？」

扉の開閉でこちらに気付いていたらしい人物は、アルベルトを振り返るなり微笑んで答える。



「ええ、お父様」

答えたのは、室内にいる着飾った少女だった。少女の名前はリリアン・ヴァーミリオン。アルベルトの娘で、父親と同じくして、王都では著名な人物だ。

たったそれだけの言葉だったというのに、リリアンの声はアルベルトの体の中に反響して広がっていく。

まるで空高いところから鳴り響いた鐘の音を、全身に注がれているかのようだ。

アルベルトは思わず恍惚としてしまう。

何より、陽光の差す部屋の中にあつて、リリアンの笑顔はアルベルトには眩しすぎた。

「……天使」

意図せず、アルベルトの口から言葉が溢れた。

リリアンの淡い水色のドレスには、緻密な刺繍がみっちり施されている。生地の色よりも僅かに異なる色が使われた刺繍は、図柄を浮かび上がらせ、ただ淡いだけのドレスの表情を変えさせていた。

ドレスの裾など、あちこちに縫い付けられたレースも、どれも繊細なものばかりだ。絹糸で編まれたからであろうその光沢は、ドレスと同じく、それだけで少女に彩りを添えている。

リリアンは長い銀髪を背中の方に流しており、装飾品の類いは外されていた。

だというのにこの輝きはとういったことか、と驚きのあまり困惑するアルベルトの目には、リリアンという輝きが洪水のように押し寄せて入ってくる。

そのうち、微動だにしない父親を不思議に思ったのか、リリアンが首を傾げた。

「お父様？」

リリアンの銀髪がさらりと肩から滑り落ちる。それが陽光で照らされるので、またアルベルトの心は揺さぶられた。

アルベルトと同じ銀の髪、蒼い瞳。そして、ほのかに色付いた頬は淡い唇と同じく、美しく整った顔をさらに際立たせる。

リリアンに呼ばれた声で、はっと正気を取り戻したアルベルトは、なんてことない風を装って微笑んだ。

「……ああいや、すまない。あまりにもリリアンが美しいものだから、呼吸を忘れていた」

「まあ、またなの？」

くすりとリリアンは笑う。

「今朝もそう言っつて、ふらついていましたでしょう？ 呼吸はきちんとなさいませんと」

「ああ、そうだな、うん。リリアンの言う通りだ」

「そうおっしゃるなら気を付けてくださいな。ベンジャミンも困っていますから」

リリアンに視線を向けられたのは、アルベルトの後方で控える老齢の従者——ベンジャミンだ。執事服のベンジャミンは、慣れた様子で「リリアン様のおっしゃる通りで」と返した。

それに「まあ」と微笑むリリアンを見て、アルベルトの表情は縮まりのないものになる。

リリアンの側に控え、成り行きを見守る侍女も、「ほう」と息を吐いて、うっとりとその景色を眺めていた。

そのうち侍女の口から「リリアン様、なんて素敵な笑顔……」という呟きが漏れる。

まったく普段通りの光景である。

アルベルトにとつてこの瞬間は、楽しみに笑うリリアンを堪能できる絶好の機会だった。そんな時間を途中で切り上げるなど、彼には考えられない。

いや、そうでなくとも、楽しそうなりリアンの邪魔をするなどあつてはならない。たとえこのあと、外出の予定があつたとしてもだ。

それでいつまで経つても、アルベルトはリリアンの笑顔に魅せられたままになっていた。

永遠にその時間が続くと思われたところに、かちやりと微かな音を立てて扉が開く。

「リリー、父上。馬車の準備が整いました」

扉をくぐるなりそう言ったのは、淡い金髪の青年だった。

「お兄様」

リリアンはその姿を認めると、すぐさま彼のもとへと駆け寄る。

途端、アルベルトが不満そうに顔を歪めたので、またベンジャミンが呆れ顔でため息を吐いていた。

リリアンは青年のもとまで来ると、高い位置にある彼の顔を仰ぎ見た。

「お兄様、本当に今日はご一緒なさるの？」

「ああ。僕は別に、城にいなくてもいい立場だから」

「まあー」

くすくす笑うリリアンを微笑ましそうに見る青年はレイナードと言い、リリアンの兄で、ヴァーミリオン家嫡男だ。

だが彼の髪色はこの通り、銀ではなく淡い金。一家で一人だけ色が違う。

ただ、リリアンはそれを気にしたことがない。兄の金髪は、月光にたとえられるような自分と父とは違い、陽光のようで穏やかな印象を人々に与えているから。

それはリリアンにとって、とても好ましいものだった。

レイナードの緩く結った長い金髪は、肩の前の方に垂らされている。髪に沿うように流れる水色の紐は、今朝リリアンが選んだものだ。

レイナードはいつもこうして、リリアンが選んだ紐で髪を結う。そうすると気合いが入るそうで、

仕事に集中できるのでとリリアンは聞いたことがあった。

レイナードはああ言ったが、王太子の補佐官である彼が、城にいなくてもいい、なんていうことはない。今日は自分のために、半日ほど休みをもぎ取ったのだと、リリアンは知っている。

それを思うと自然と笑みが溢れ、つい、リリアンの口角は上がってしまった。

リリアンの様子に気付いたららしいレイナードも、つられて頬を緩める。

「嬉しそうだな、リリー」

レイナードがそう言えば、リリアンにはこりと笑みを浮かべ、頷いた。

「ええ。三人揃っての外出は、本当に珍しいでしょう？ 実は昨夜から、ずっと楽しみでしたの」

「……そうなのか」

「そうよ」と返すリリアンに、レイナードは目を細めた。

(眩しい。リリーが、光り輝いて見える)

お出掛けを心待ちにし、楽しみにしていたのだと語るリリアンは、レイナードから見ても、有り体に言っても可愛い。

二人きりの外出でないのは最初から諦めているからか、こんな様子のリリアンを見られるだけでレイナードの気分は高揚する。

そんな彼の気分は表情には全く現れないが、リリアンには伝わっているのだろう。レイナードと

視線が合うと、リリアンはまたにこりと微笑んだ。

それでさらに気分を良くするレイナードだったが、直後、アルベルトが言い放った言葉に熱が引いていく。

「私は気付いていたぞ。心躍らせるリリアンの様子に」

「妙な張り合いはやめてください」

得意気な父親の表情とは対照的に、レイナードはすつと真顔になった。

目の前で父と兄が言い合っている状況に、リリアンはと言えば、「気付かれていたなんて……恥ずかしいわ」と、先ほどまでとは違う意味で、頬を赤くしていた。

「お父様の目は誤魔化せませんわね」

そう言いながら、リリアンは白く細い指を頬に添えた。恥ずかしさに耐えきれず、やや俯きがちに父と兄の様子を窺っている。

つまるところ、上目遣いとなっているリリアンは、アルベルトとレイナードからすると別段、愛らしく見える。

「リ、リリアン……！」

アルベルトは天使のはにかみに、意識が飛びかけるのを耐えた。

「リリー……！」

レイナードは妹の可愛らしい仕草に、つい名前を呼んでしまった。

一方でリリアンは、そんな父と兄を見て、ふと我に帰る。はつとして表情を改めたが、それすら二人の心を掻き乱すのだから、始末に負えない。

このままではいつまで経っても出発できないので、リリアンはもう一度、口元を引き締めた。

「ええと、そろそろ参りしましょう？ あまり遅くなつてはいけませんわ」

「ああ、そうだな」

アルベルトはそう返すものの、締まりのない笑顔のままだ。それはリリアンには見慣れた顔で、これはこのまましばらく戻らないだろうな、と予想がついた。

仕方なく父親をそのままにしておくことにしたリリアンに、侍女がそつと近付いてくる。

「リリアン様、こちらを。本日はよく晴れておりますので」

「ありがとう、シルヴィア」

リリアンは侍女のシルヴィアから帽子を受け取ると、素直にそれを被った。

つばの広い帽子がほどよくリリアンに影を落とす。すると、陽の当たった銀髪が一層映えるのだ。それはまるで、木漏れ日で水面が煌めいているかのよう。

素晴らしい輝きを放つリリアンに、シルヴィアが目を潤ませ、ベンジャミンは感嘆の息を漏らし、レイナードは強く頷く。

そんな中、アルベルトはただ一人、静かに涙を流していた。

(圧倒的……美……！)

つう、と流れていく一筋の涙。これはただの涙ではない。リリアンがアルベルトにもたらした、驚喜の涙である。

(ああ、なんという……！ す、素晴らしい。この、光と闇のコントラスト！ リリアンの煌めきを際立たせる影、それすら自身の一部であるかのように見える。帽子の落とす影から覗く瞳が、一層鮮やかに感じるとは。素晴らしい。森羅万象、ありとあらゆる事象を自らのものにしてきているなんて！ ならば、これほどまでに美しくなるわけだな。リリアンと世界は、まさにひとつになっている。世界がリリアンを輝かせているのだ。そんなリリアンが、美しくないはずがない！)

そう結論づけたアルベルトは、うむ、と頷く。

そんな彼の姿はレイナードらと比べても異質極まりないのだが、リリアンは、目の前の光景には特になんの反応も示さない。

リリアンにとって、それはいつも通りの見慣れた景色だったので、当然と言える。



最低限の従者を連れ、外出のため、一家はようやく馬車へ乗り込んだ。

一家三人での移動の際は、リリアンが一人で座り、対面する形でアルベルトとレイナードとが並ぶことになる。リリアンの隣も捨てがたいが、やはり正面に見えていた方が、二人が気分良く過ごせるからだ。

馬車では、向かう先の話題が中心となる。

レイナードはリリアンに外出の経緯を尋ねていた。

「それにしても珍しいな。リリーがバザーに行きたがるなんて」
リリアンは兄の方へ視線を向けて、口角を上げる。

「お友達に聞いて、どんなものか見てみたくて。伯爵夫人が、定期的に主催されているものだから、開催の度に趣旨が変わるらしいの。面白いでしょう？」

「ああ、蒐集家の……売り上げのほとんどを寄付されているという話だけだ」

「ええ。わたくしもそう聞いているわ。品物を集めるだけでなく、それを介して人との繋がりを作ることが好きで、交流が広いとか。それでバザーは毎回盛況なので。参加者を募ると、すぐにいっぱいになるとか」

「なるほど。それだけ人との繋がりとというのは、利が大きいんだな」

「かも知れませんが。それでどういふものなのか、実際に見てみたくなったの」

リリアンがそう言うと、レイナードは、そうなのかと納得した風だったが、なぜかアルベルトが思ってもみなかったとばかりに狼狽している。

「リリアン、何か必要なものがあれば、そう言ってくれて構わないんだぞ。満足するまで、好きなだけ家に商人を呼ぶのに。ただでさえリリアンは我が儘を言わないだろう。少しくらい買い物をして、何も問題は無い」

リリアンは少し困ったように頬に手を添えた。

「お父様なら、そうおっしゃると思つたわ。でも、違うの。そういう所には、思つてもみない出会いがあると思つたの。見たことのない意外な、素敵なものが見られるのではないかと、そう思つたのよ」

「素敵なもの……」とアルベルトは繰り返す。

近頃のリリアンは、唐突に遠くの方を見ては、ふう、とため息を溢すことが増えた。物思いに耽る姿は麗しく、大人びた横顔が美しいのでアルベルトはつい見惚れてしまうが、何か不安や心配事があつてそうなっているなら話は別だ。

アルベルトには、そういつたリリアンの不都合を取り除く義務がある。なので今日の外出は、アルベルトにとつても都合良かった。家では何かと遠慮しがちなリリアンだが、外という普段と違う環境であれば、本音を窺い知れるかもしれない。

リリアンの望む、素敵なもの“とやらを、絶対に見つけよう。そうひっそりと闘志を燃やすアルベルトだった。

しばらく走り、アルベルト達はバザーの会場付近で馬車から降りる。

馬車が停まるなり真つ先に外に出て、リリアンへと手を差し伸べるアルベルトは、レイナードに呆れて半目で見られようとも意に介さない。と言うより、リリアンしか目に入っていないかった。

リリアンの方は、いつも通り父の手を取り、馬車を降りている。石畳の道に降りると、興味深そうに周囲を見回していた。

バザーは倉庫街の大通りを封鎖し、そこに露店を出すという形式だ。庶民も貴族も自由に参加できるので、実に雑多な人混みが出来上がっている。

ヴァーミリオン一家は、バザーの会場となる一角の、さらに端の方で降りたというのに、すぐさま通行人達の視線を集めた。

まずそのきつかけとなったのは、一家が乗ってきた豪華な馬車だ。庶民の中には貴族の紋章を把握していない者も多いが、それでも貴族のものと分かるほど立派な装飾の馬車は注目を集めた。

そして、そこから降りてきた人物達に、人々は釘付けになる。

真つ先に馬車から降り立った長身の男も、その彼の手を取る少女も、美しい銀髪をしている。少女のあとに馬車から降りた青年の髪は、金。

この国では、銀色の髪を持つのは王族だけだ。加えて、その家族構成、それだけで人々は一家が何者であるのか分かった。

「ヴ、ヴァーミリオン公……！」

驚愕したかのような囁きが群衆の中から起きる。ただ、その囁きを拾った者は、その音をどこか遠くに捉えていた。

なぜなら、三人があまりに眩く、誰もが囁きに意識を向けることができなかったからだ。アルベルト達が身に纏うものもそうだが、彼ら自身が輝いているように見える。

ふいにリリアンが声を掛けると、彫刻のようなアルベルトとレイナードの表情は途端に華やいだものに変化した。その変貌たるや、辺り一面に花が咲き誇ったかのようなようだ。

それより一層、人々は彼らから目を離せなくなる。

そんな三人のいる周囲だけ、ぼつかりと空間が空いていた。なのに遠巻きにする誰もが三人に注目し、身動きひとつしない。

あまりにも異様な光景だ。けれども、アルベルト達はそれを気にも留めなかった。ごく普通に歩きただし、今もなんでもない風で露店を眺めている。

手近な店を覗き込んだリリアンは、率直な感想を口にする。

「不思議な道具や、年代を感じるものがいっぱいね」

「ガラクタと時代遅れのゴミばかりだな」

「もう、お父様ったら。そんな風に言っではいけないわ」

確かに、使い方の分からないものや、今はもう使われていない道具など、置いてあるものは様々だ。だが父の言い方はあまりにも酷いと、即時リリアンはたしなめる。

アルベルトは、本当のことだから、と特に悪いとは思っていないかった。しかし、リリアンに叱られたのは素直にショックなので、言葉を詰まらせる。

そんな父と妹を見るレイナードは、二人を見ているようでその実、妹しか視界に収めていない。こういう場でどうしようもない台詞を吐く父親は、放っておくに限るのだ。

三人はリリアンを中心に、気ままに移動する。バザーは盛況というだけあって、来場者はそれなりの数がいた。

そこを、一家とは一定の距離を保ちつつ、群衆もつき従って移動していく。視線をアルベルト達に集中させたままで、だ。

他人の視線が集中する方向はどうしたって気になる。なので気が付いた者から順に、群衆に釣られてその視線を追い、一家を目にすることになった。

すると人々は、決まってそこで一度動きを止め、群衆に混ざってフラフラと歩き始める。あつと言う間に大通りは人混みでいっぱいになってしまった。

ただ、アルベルトら三人の周囲には誰もいないので、散策するには快適である。
軽い足取りのリリアンは、また別の何かを見つけたようだ。

「まあ、変わった形のランプ」

確かに、古いランプは見たことのない形状をしていた。

その不思議な形状は、油の補給の時間を楽しくできるようにした結果らしい。しかし、そのせいでメンテナンスの時間が増えてしまい、結局使われなくなつたとか。

今の慣れた形ひとつ取っても、そこに歴史があるのだと、勉強になったリリアンである。

アルベルトもランプを見ていたが、特に何も言わなかった。

インテリアに良いのでは、とも思ったリリアンだが、ランプは家の家具とだいぶ趣きが異なる。機構は面白くてもそれまでだったので、忘れることにした。

露店を離れ、三人は通りを進んでいく。実際に歩いてみると、倉庫街の一区画だという会場は、リリアンの想像よりも広く感じた。

このバザーは、主催者である伯爵夫人の意向で、見る方にも店を出す方にも身分を問わないとされている。それは自由な反面、採め事や勘違いによる諍いが起きやすい。そのため、会場のあちこちに警備員が配置されていた。

その甲斐あつてか、リリアンは思い思いに自由に会場を歩くことができた。時折一緒にレイナー

ども店先を覗くことがあつて、あれはなんだ、これはどうかと言ひ合うのは楽しかった。

そうしていると、アルベルトもリリアンを呼ぶことがあつた。

アルベルトが勧めるものは、さすがと言うべきか、リリアンの好みにぴったり合致しており、どれも魅力的だ。だが残念ながら古いものが多く、使うのにコツが必要になるものばかり。使いこなせる気がしないリリアンは、どれも購入に踏みまきることができない。

そんな使い勝手の悪い商品にアルベルトが憤激し、改造して使いやすくしようかと言ひ出したから、リリアンは慌てて止めた。

「お父様、おやめください。わたくしには必要がないだけですから」

「どうして止めるんだリリアン。どれも見た目は気に入っているようじゃないか、使いにくいという点が問題なら、使えるようにするぞ。こう見えて、そういうのは得意だからな」

「お父様が魔道具に精通しているのは存じています。でも、お父様のお手を煩わせてまでとは思いません」

「くっ……リ、リリアン、なぜだ。なぜそんなに気を遣う!? お前になら、どれだけ無茶を言われようと構わないというのに……!」

魔道具は、魔力や知識がなくても、魔法と同等の事象を起こせる便利な道具だ。

ランプや温水の出る洗面台などがあり、トゥイリアース王国では研究が盛んに行われている。

アルベルトはリリアンの言葉は信じ難いと言わんばかりに拳を握り締めているが、リリアンとしてもそこは譲れない。父の言う通りになっていると、すぐ部屋がものどいっばいになってしまふ。そうなるのは整理が大変なので、リリアンではできる限り買う品を厳選しているのだ。

だが父の言った、見た目は前時代的だけど機能は最新、という道具は、ひよっとしたら格好いいのかもしれないと、リリアンはふと思う。けれど、古いまま大事に扱われてきた品々を改造する、というのは、なんだかちよつと違う気がするとも思った。

それに、当のアルベルトが作った、もつと便利な家具がヴァーミリオン家には揃っているのだ。リリアンとしては、目の前にある品を選ぶ理由がなかった。

一方アルベルトは、リリアンに何かプレゼントしたくて堪らなかつたので、少しでもリリアンが気に入ったものは全て購入する気でいた。断られる可能性は考えていたが、まさかひとつも買わせてもらえないとは思ってもみなかつた。そのため、あの手この手で購入を試みる。

でも結局、リリアンが首を縦に振ることはなく、ギリギリと奥歯を噛むアルベルトであった。そうして会場を半分ほど巡った時だった。

「……あら？」

リリアンが何かを見つけたようで、足を止める。

アルベルトとレイナードの動きもそれに連動して止まった。

「リリアン？」

「見て、お父様。とても綺麗な織物」

アルベルトが呼びかけると、リリアンはある方を指さし、そのままそちらへ向かう。

一瞥もされないことにショックを受けつつ、アルベルトはすぐさまリリアンの隣まで移動した。

リリアンが見つけたのは、机の上に広げられた織物だ。毛足は長いが、床に敷くには小さいので、絨毯とは呼び難い。

レイナードもそこが気になったようで、リリアンの隣で首を捻っている。

「端切れみたいだな」

「小さいけれど、素敵な模様ね。それに、この赤色。とっても綺麗な色だわ」

リリアンの言った通り、織りの意匠は細かくて趣きがある。色は鮮やかな赤。どこか深みを感じる色合いは、他で見た覚えがない。

小さいが、確かに品物は良く見えた。何よりリリアンの反応がいい。

アルベルトは織物を展示していた男に視線を向ける。

「もつと大きな織物はないのか」

しかし、そう尋ねられた商人の男は、あわあわとするばかり。

「も、申し訳ありません。これは、この切れ端が残っているのみで」

「残る？」

商人の言葉をレイナードが訝しんだ時だ。ふいにアルベルトがリリアンの左隣へ回り込んだ。

ほとんどリリアンの前に立ちほだかる形で移動したアルベルトを、彼女は不思議そうに見上げる。アルベルトは正面を、ほとんど睨むようにまっすぐ見ていた。

それでリリアンもそちらへ目を向けたのだが、人混みから女性がこちらへ向かって歩いてくるのが見えただけだった。

リリアンはその顔に見覚えがなかった。だからアルベルトはその女性を警戒しているのだろう。女性は三人の間際までやって来ると、そこで礼をしてみせた。スカートを持ち、頭を下げる。

——貴族女性の挨拶、淑女の礼だ。

「初めてお目に掛かります。わたくしはマルロ・サートス、このバザーの主催者でございます。ヴァーミリオン公には皆様揃ってのお出まし、歓迎申し上げます。お気に召すものはございますか？」

名乗りを受けて、リリアンはそっと息を吐く。おかしい人物ではないことに安堵した。

だが挨拶を返そうにもアルベルトが前を塞いでいるので、出て行きようがない。

サートス家は伯爵家で、対するヴァーミリオン家は公爵家。つまり、ヴァーミリオン家の方が爵位が上だ。

普通、上位の爵位の者から声が掛からない限り、下位の者は先に挨拶をしたりしない。だが、今の場所からすると、主催が公爵家の人間を出迎えない方が無礼となる。たとえばどんなに小さな催しでも、会場にいるなら主催者は顔を見せるべきなのだ。

そうして、挨拶されたなら、挨拶を返すのが礼儀だ。なのにアルベルトはにこりともせず、ましてや口を開く素振りすら見せない。

そのせいで辺りに微妙な空気が漂う。

マルロと名乗った女性はややふくよかで、レモン色の幅のあるドレスに大きな鳥の羽根がついた帽子を被っている。薄手の手袋をした手には、羽根のついた扇を握っていた。

これが一昔前のトレンドだと気付いたリリアンは、会場に並ぶ品々の趣旨を読み取った。

多少無作法になるが、この空気のままよりは、トリリアンは父親の後ろから歩み出て、軽く膝を曲げる。

「ご挨拶をありがとうございます。わたくしはリリアン・ヴァーミリオンですわ。友人からこの会のことを聞いて、どうしても来てみたくて、お父様にねだったの。お邪魔ではないかしら」

「そんな、滅相もございません」

落ち着いている風だが、挨拶を返されたマルロには動揺が見られる。リリアンは、それをアルベルトに睨まれたからだと思っただけが、実際にはそれだけが理由ではなかった。

(こ、ここ、これが……ヴァーミリオン公……！)

サートス伯爵家は新興でもなければ古くもない、言ってしまうえば弱小のありふれた家門だ。

マルロが骨董品を集め、時折チャリテイバザーを開く以外、これといった事業をしているわけではなく、ヴァーミリオン公爵家とは直接の関わりなどない。

そもそも、当主のアルベルトは王の弟である。雲の上の存在と言えるアルベルトとの対面は、しがない伯爵夫人のマルロには荷が重たかった。

それだけではない、アルベルトにはある噂があった。もしそれが本当だったとしたら、迂闊なことは話せない。

顔の広い友人がマルロにいくらでも噂を披露してくれたが、どれも信じられないような話ばかりなのだ。

マルロの友人曰く、ヴァーミリオン公は『愛娘のためならばなんでもする』らしい。

それを聞いて『それだけ？』と言ってしまったマルロを、友人は責めた。

娘を可愛がって甘やかすなど親なら誰もがすること、どこも珍しくはない、というマルロの反論は聞いてもらえなかった。

『そんな生易しい溺愛ではない』と友人は言っていたが、ヴァーミリオン家は資産が豊富だと聞いている。その資産と権力があれば多少の無理は通せることは明白だというのに、生易しくない溺愛

とはどんなものなのか。

結局マルロにはどの程度なのか理解できなかったが、そんな話をした矢先であるので、本人との邂逅は正直に言って、心臓に悪い。

だがそれとは関係なく、相手は王弟、公爵家当主だ。もしも怒らせたりしたら、サートス家は簡単になくなってしまうだろう。

そういうわけで、淑女の微笑みを保ちながらも、緊張で汗の止まらないマルロだった。声が震えそうになるのも、必死で堪えている。

そんなマルロとは対照的に、リリアンが軽やかな声で言う。

「サートス伯爵夫人。もしや今回のバザーの趣旨は、前世代の文化に触れること、かしら？」

それは思ってもみなかった言葉だ。思わずマルロは目を見開いてしまう。

そんな様子にアルベルトがびくりと眉を寄せたのだが、一気に気分が高揚したマルロが気付くことはなかった。

「お気付きになられましたか」

「夫人のドレスを見て、もしかして……と思ったのだけれど」

マルロは笑みを浮かべると、大仰に頷く。

「ええ、ええ。その通りでございます。本日取り揃えましたのは、どれも一世代前の道具や装飾品

ばかり。新しいものにはない、使い込まれた道具なりの良さがございますの。そういったものを、今一度見直してはどうか——というのが主題なのですわ」

「それは、面白い試みね」

リリアンは正直にそう感じた。

バザーという性質上、使い古したもののばかりになるのは当然だと思っていたが、あえてそれらを集めていると言われると違って見える。使い込まれた品々は大事にメンテナンスをしないと、後世に遺すことができない。新しいものを作るのは簡単だけれど、そうやって手入れをせずとずつと使い続けることも、また大事なのだ。

「ではひよっとして、こちらもそうなのかしら」

リリアンは直前まで見ていた赤い織物に視線を落とす。

「左様でございます」

マルロはこくりと頷くと、リリアンの真横まで移動する。

「これは『オルオポリス織り』と呼ばれている織物、そのレプリカですわ。とある地方で作っていた伝統工芸品なのですが、様々な事情により、その技術は喪失してしまったのです。もともと希少だったこともあり、本物には相当な価値がございます。これは模倣品ですが、とても良い出来栄えでして、本物と遜色ございませんの。価値ある品、あるいはそれに準ずるような品を、多くの方に

見ていただきたくて、展示しているのです」

「こちらは、そんなに貴重なものなのですか？」

「ええ。一般にはもう、どこにも残っていません。亡国にのみ伝わっていた、断絶した技術なのですわ」

「まあ！」

じっくり織物を観察していたリリアンが声を上げた。

「素敵……こういったものとも出会えるのね」

リリアンはそう言って目を輝かせる。感動しているようだ。

その表情にピンとくるものがあったアルベルトは、よし、と頷く。

「なら、これを買おう」

「えっ？」

「いくらだ？」

リリアンの戸惑いを置き去りにして、アルベルトは商人の方を向く。相変わらずあわあわと両手も視線も彷徨わせる商人は、何も答えられない。

商人と一緒にマルロも分かりやすく狼狽している。

その様子にレイナードが口を挟んだ。

「レプリカとはいえ、資料的な価値も含めると、相当な値段になるのでは？」
するとマルロは大きく頷く。

「その、おっしゃる通りで……値を付けられる類いのもものではございません」

「話にならん」

「ぼつさりと言ひ捨てたのはアルベルトで、不^ふ服^{ふく}とばかりに眉を寄せていた。

「言え。金塊^{きんかい}でも鉱山^{こうざん}でも、いくらでも出してやる」

「そぞ、そんな」

（な、なんなの、その単位！）

そんな言葉は、マルロの口からはとてもではないが出てこない。代わりに出たのは苦しげな息で、それも相当か細かった。

なにせ、さつきからずつとアルベルトに睨^{にら}まれているのだ。

冷え冷えとした視線に射抜^{やぶ}かれると、先ほどリアンへ向けていた、慈愛^{じあい}溢^{あふ}る瞳^{ひとみ}は幻覚^{げんかく}だったのでは、という気さえする。

「こ、こちらは売り物ではございませんので」

「だから、なんだ？」

マルロがなんとか絞り出した言葉は、アルベルトの確かな庄力^{じょうりき}をもって押し潰^{つぶ}される。

「模倣品であろうとそうでなかつたら、リアンが気に入っているのは事実だ。私にはこれを手にする義務がある。言え、いくらだ。白金^{しろぎん}貨^か百枚では足りないか？」

「……！」

アルベルトの言葉にマルロも商人も息を呑んだ。

白金貨の価値は、一枚で金貨十枚分。金貨一枚で、庶民^{しよみん}の夫婦二人の、一ヶ月分の生活費になる。確かに本物であれば、白金貨が百枚あつても購入するのは難しい。けれどもこの場にあるのは、見た目を寄せただけに過ぎないレプリカ。製法がまったく世に残っていないから、それらしいものを再現しただけなのだ。

そんな品物にそれだけの白金貨を積むというのは、マルロの常識からかけ離れている。けれどもヴァーミリオン家は非常に裕福であると聞いた。実際に支払ったとしても、問題はないのだろう。

そうは思つても、適正な値段など、マルロにも付けられるものではなかった。そもそも手放すことを想定していないのだ。レプリカを預かる商人でさえ、金銭価値で考えたりはしていなかった。沈黙^{ちんもく}を否^ひと受け取つたのか、アルベルトは眉間^{みげん}に皺^{しわ}を寄せる。

「では、白金貨三百枚でどうだ」

「さんっ!!」

マルロの口から、息を吸い込む音と驚愕の音が、悲鳴ひめいとなって漏れた。商人の方は、あまりの金額に顔色を失くしている。

金額が少ないのではなくて、そもそも売れないのだ。それを分かってもらうには、どうしたらいいのか。マルロは思考を巡らせたが、もう彼女には物事を考える力は残っていないかった。視線を彷徨わせ、「ええと、その、あの」と意味のない声しか出せない。

「まだ足りないか」とアルベルトが金額を増やそうとしたところで、二人の顔色で色々と察したりリアンが、そっと父親の上腕じょうわんに触れる。

「お父様。わたくしは別に、これでなくとも構いません」

リアンに触れたことで瞬時に意識をそちらへ向けたアルベルトは、その言葉の意味を正しく理解する。と同時に、「そんな」と目を見開いた。

「だが気に入ったんだらう？」

「わたくしにはまだ、これだけの歴史ある品を持つ品格は備そなわっていません。たとえレプリカであつてもです」

「！ そんなことはないぞリアン！ この国に、いやこの地上に、リアンほど素晴らしい人物は他に——」

「でも、そうね。この赤色はとても綺麗だと思っわ」

「——そうか。じゃあこの色と同じものを探そう」

父親の言葉を遮さかったリアンが所感を述べたと思つたら、アルベルトはくるりと意見を翻ひんした。

あとほもう、アルベルトはレプリカにこだわった素振りを見せず、従者を呼びつけて赤の織物の手配をさせるように指示をしている。

「国外もくまなく探せ」と言っているのが、マルロにも聞こえた。

ふいにマルロの脳裏のうりに友人の言葉が蘇よみがえる。

『閣下かくかは御息女ごせきじよのリアン様を、それはもう、大切に大切になさっているそうなの。掌中しょうちゆうの珠たまどころではないわ、世界の全てを捧げるくらい可愛かわいがつているそうよ……そんなリアン様が、何かをしようとしたら、閣下はどうするか。よほどの愚鈍ぐだんでなければ、想像がつくでしょう？』

マルロはそれに、『きつと最大級の後押しをするでしょうね』と笑って返した。そして『邪魔をするような輩は、切り捨てるのかしら？』とも。

(こういうことなのね……！)

マルロはようやく理解した。

娘のためならば手段は選ばない。娘が望んだものがあれば、何を差し置いても必ず手に入れる。トウイリアース王国のみならず、大陸中を探してもだ。

アルベルトはさつきまであれほど猛烈にマルロを睨んでいたのに、今はもうすっかり上機嫌でリアンに熱視線を向けている。その口元は緩んでいて、自然な笑みを浮かべていた。

その微笑に思わずマルロは惚ける。

ヴァーミリオン公と言えば、娘の溺愛の他に、もうひとつ有名な逸話がある。それは、その美貌には並ぶ者がいない、というものだ。

彼が若い頃、その姿絵が秘密裏に売買されていたことがある。月光の貴公子とかいう、妙な通称があったが、爵位の高い女性達が独占してしまったので、絵の写しなどマルロは見たことがなかった。

ただ、一目それを見た者は、漏れなく彼に魅了されるという話だった。

マルロはアルベルトの姿を見て、それが誇張でもなんでもないのでと理解する。

(なんて、美しい……)

娘に微笑んだ瞬間は、まるで月明かりに照らされたように周囲が明るくなった気がした。

その光景たるや、大聖堂に飾られる絵画であつてもおかしくはない景色だ。ここはただの倉庫街で、やっているのはただのバザーだが、これが見られたのは、それだけで値打ちがあると錯覚するほどの光景。

(ああ、今日、バザーをやつて良かったわ、本当に！)

マルロは謎の充足感を覚える。

彼女が理解したり惚けたりしている間に、ある程度の話が進んだらしい。くるとアルベルトが振り返り、マルロの心臓がどくと鳴った。

「レプリカを作った人間はどこに？」

「えっ？」

アルベルトに見惚れていたせいでマルロの理解は遅れる。

瞬いたマルロは一拍置いて、ようやく言葉を呑み込んだ。

「レプリカを作った人間、ですか？」

言った瞬間、アルベルトにギロリと睨まれ、マルロは思わず仰け反つてしまふ。

「似たものがないなら作ればいい。これを作った人間がいるのなら話は早いだろう」

「それはそうですが……申し訳ございません、我々はそのような者の所在は存しておらず」

マルロの説明には商人も、うんうんと頷いている。

しかし、知ったことかと言わんばかりにアルベルトは言い捨てる。

「なら探しておけ」

「ええっ!？」

それは提案でもなんでもない、命令だ。有無を言わさない、絶対的なもの。

マルロはすぐに口元を覆ったが、反射的に飛び出た驚きの声はしつかり周囲に響いてしまっていた。

それを批判と取られたのか、アルベルトから発せられた冷やかな声と空気がマルロを取り囲む。「リリアンが望んでいるのに、やらないとでも言うのか」

「——そ、その理屈はなんなの!？」

マルロの頭に咄嗟にそんな考えが浮かんだが、アルベルトの噂の真相を目の当たりにした彼女には、すぐにそれが当然の主張のように感じられた。

なにせ机の上に乗る小さな織物に、白金貨を積むような男だ。

これがヴァーミリオン家の当然なのだろう。

ならばマルロはサートス伯爵夫人として、それに向き合わなければならない。

「や、やりませう。せつかくおいでいただいたのに、なんの収穫もなしでは、リリアン様にも申し訳ありません」

マルロはぎゅっと扇を握り締めると、リリアンをまっすぐに見つめる。その瞳には確かな覚悟があった。

そこまでの視線を送られては、リリアンも頷くしかない。

「お父様」

リリアンは父親を振り返る。

マルロの厚意を受けようと言うつもりだったが、アルベルトはリリアンが呼んだ声でその意図を汲んだらしい。目が合うと、アルベルトはリリアンへ向けて微笑んでいた。

「どうやらマルロの提案は了承されたようだ。」

ほっと胸を撫で下ろすマルロだったが、すぐにはつとなる。

このサンプルがどれ程貴重なのかをマルロは良く知っている。作り手を捜す手掛かりが存在するのかどうかさえ分からない。

こちらで頷いておいて何もできませんでしたでは、アルベルトは納得しないに違いない。

マルロは急いで従者と商人を呼び、すぐに相談を始める。リリアンらへの挨拶もそこそこに、マルロは慌ただしく去っていった。

その背中を見送るリリアンは、これで良かったのかしら、と首を傾げたくなる思いだ。

(もし職人が見つからなくても、夫人には代わりの織物を頼みましょう)

内心そう決めたリリアンに、アルベルトが手を差し出す。

「私達も帰ろう、リリアン。やる事ができてしまった」

「ええ」

そう答えるが、リリアンはなぜかその手を取らなかった。

どうしたのか、と首を傾げる父親をリリアンは見上げる。

「それはそうと、お父様」

その表情はどこか険しい。責めるような、そんな風にさえ見えた。

短時間のうちにリリアンがそんな風になる理由に思い当たるものがなく、ますますアルベルトの困惑は深まる。

だがリリアンは、アルベルトの困惑など見えていないように、ずばりと言い切った。

「人にものを頼むには、相応の態度があるでしょう。サートス伯爵夫人へのあの言いようは、どうかと思います」

リリアンにそう言われ、アルベルトは決まり悪げに視線を逸らしたのだった。



マルロはアルベルトの依頼を了承したものの、サートス伯爵家ではレプリカの制作者の所在は掴めなかった。前任の管理者に問い合わせても、その前の管理者から引き継いだだけだから、としか返答がない。

ヴァーミリオン家で集めた情報も似たようなものだった。こちらは国外まで探ったが、目ぼしい

情報は上がってこない。きちんと調べがつくまでは、もう少し時間が掛かるだろう。

ただマルロの方は、近い風合いの赤の絨毯を見たと言った商人を見つけていた。後日、アルベルトのもとに送られてきた報告書には、その絨毯を見たという屋敷の情報がかかれていた。

これだけでは、収穫とは呼べない。そのことにアルベルトもレイナードも眉を寄せる。何しろリリアンに何も渡せていないのだ。

バザーから帰った時は楽しそうだったが、数日するとまた、リリアンは物思いに耽るようになった。

その姿から、レイナードとアルベルトは同じ考えに至る。

「父上。やはりあの織物でなくてはだめなのでは」

「だろうな。いや、そうに決まっている」

二人は同時に報告書に目を落とした。その報告書はマルロからのものとは別のもので、ヴァーミリオン家で作成されたものだ。

それを持ち込んだ従者のベンジャミンも、情報の共有という名目で呼ばれた侍女のシルヴィアも、内容を把握している。

喪失したという、オルオポリス織りの製造方法。それを探れば探るほど、あまりにも自然な流れで消えていたのだ。

まず、オルオポリス織りの人気が出たために模倣品が横行した。それらは質の悪いものばかりだったので取り締まりが強化され、正規品には、品質の保持のために出荷制限と受注の制限がかかった。

そうなる何が起こるか。価格の異常な高騰だ。店頭でまともに買えないので、購入先は主にオークションになる。価格は消費者が勝手に吊り上げていった。中には絨毯一枚と、それを使う豪邸と同じ価値、というもので出たしまった。

早くからオルオポリス織りの製造と販売には国が介入していたが、人気は留まるどころか加速した。

そのうちに敷物一枚を自当の強盗事件が起きてしまったから大変だ。犯人は捕まって正当な処罰を受けたが、その事件を不安視する声も多かった。同じ事件がまた起きるのではないかという不安だ。その心配はもつともだろう。

そんな中、機織りの工場で大きな火災があり——技術も、在庫も、何もかもが燃えてしまった。国が事業を復興させようとしたが、職人に口伝でしか技術が伝えられていなかったこと、火事の際に製造に関わった者達が散り散りになったことから、うまくいかずに頓挫したそうだ。

その後、いくら復興させようとしても、その度に問題が起きて失敗が続いた。あまりにも頻繁に問題が起きるものだから、ついに断念せざるを得なかった。

「職人達が意図的に技術を失わせたか」

「おそらくは」

アルベルト達は、調査結果からそのように結論づけた。理由は様々だが、あまりに失敗が続いているのが偶然とは思えず、その失敗の原因に作爲的なものを感じ取ったのだ。

そうなる話が違ってくる。何かしらの意図をもって技術を伝えなかったとなると、足跡を追うのは難しいが、その辺りの事情から探れば、製造者を捜す糸口くらいは見つかるかもしれない。

「サートス家の報告書にあった、近い風合いの赤の絨毯というのを確認してみよう」

アルベルトはマルロからの報告書を手にするそう言った。
それにレイナードが息を吐く。

「報告書によれば、持ち主は高位の貴族からの接触を避けているようですが」

「そんなことは分かっている」

「……では、どのように」

「方法などいくらでもある」

そう言い切るアルベルトの姿に、レイナードは顔を顰めた。

「……無作法な真似はあまり感心しません」

「必要とあれば、手段を選んでいない場合ではない」

「それは、そう、ですが」

「だったらやるの一択だ。なぜならこれは現在、我が家で最も優先される事柄だからな」

アルベルトはにやりと笑みを浮かべ、椅子から立ち上がる。

「リリアンのためだ。躊躇うことなど何ひとつない。可愛いリリアンのためだからな」

そうですか、という言葉のあと、思わずレイナードは目を細めて「今、同じことを二回言いましたね」と漏らすのだった。



王都ミールから二時間ほどの町の、とある商家の屋敷の前に豪華な馬車が停まったのは、昼を前にした頃である。

大きな机を前にする商家の女性——カミラのもとへ、店番が慌てたようにやってきた。

「当主付きの執事と名乗る方が、責任者にお会いしたいと」

カミラが詳しく聞いてみれば、馬車はこの区域にあまり見ない様相で、家の紋章が入っていなかったという。

身分を隠したいどこかの貴族のものだろう。当主付きの執事だという男は、この屋敷が商家のも

のであるということを知ってやってきたのだ。
店番からの話でそう判断したカミラは、仕方なく席を立った。その際に傍らに立つ秘書の男性に目を向ける。

この商家の実際の経営は、この秘書の手によるところが大きい。

(どういった話かは分からないけれど。彼にも同席してもらった方がいいわね)

カミラはそう考え、秘書と共に執事という男の話を聞くことにした。

年若い女性であるカミラは、商談の席になると侮られることが多い。それも秘書を伴う理由のひとつだった。

カミラはブランケットを羽織ると、階下へ下りていく。

「お待たせしました」

商談を行う応接間でカミラが声を掛けた相手は、白髪の老人だった。

「お時間をいただきありがとうございます。私はベンジャミンと申します」

彼はカミラを認めると、立ち上がって丁寧にお辞儀をする。それでカミラは、ベンジャミンと名乗った老人は教育の行き届いた貴族の使いなのだろうとあたりを付けた。

立ち上がった老人は想像よりもがっしりとした体格をしており、カミラの目には座っていた時の印象よりも若々しく見えた。また、隙のない目付きや顔付きのわりに、とっつき難い雰囲気はなく、

重厚な雰囲気役人か軍人のように感じた。

ベンジャミンの挨拶を受け、カミラも会釈を返す。

「私が代表のカミラと言います。こちらは、私の秘書です。同席をお許しください」
「承知いたしました」

カミラが席を勧め、向き合うと、ベンジャミンは「早速ですが」と切り出す。

「当家の主人が、是非にと願っているものがございます。こちらでしか取り扱っていないことですので、伺いました」

「それでわざわざ？ 失礼ですが、どちらからのご依頼でしょう」

カミラが名乗っても、話を切り出しても、ベンジャミンはこの家の者かは言わなかった。

自身の名を言うばかりのベンジャミンに、カミラは警戒せざにいられない。身元の分からない相手に取引を持ち掛けられ、それに乗る商人は、普通でないからだ。

店の者が紅茶を運んで来てもそれを手に取らず、ただびしりと姿勢を正すだけのベンジャミンは、問い掛けには答えずに、カミラが思ってもいなかったことを告げた。

「オルオポリス織り、それによく似たものがこちらにあるとか」

カミラはひゅっと息を呑む。秘書も、同時に雰囲気固くした。

ベンジャミンが口にしたその名前は、カミラ達にとって特別なものだからだ。

カミラの中で警戒心が高まる。

「それは……一体、どういう」

「当家のお嬢様が、かの織物をとても気に入られまして。ですが、その織物はもうすでに手に入らない。技術も、それを受け継ぐ者も喪失してしまったとか」

「そう、なのですか」

「ええ」

ベンジャミンはなんでもないので続ける。

「こちらの屋敷の織物は、オルオポリス織りとよく似た意匠なのだそうですね。それを知った主人が、是非、織物を購入させてもらいたい、と」

カミラは黙ってそれを聞いていた。

普通なら商機と見ても良さそうな話だが、ベンジャミンの話の中の「かの織物に良く似たものがある」という言葉、これを肯定できないカミラは、どのように言うべきかを考える。

下手に言って興味を持たれたくはない。そう考えたカミラがちらりと秘書を見れば、彼も硬い表情でこちらを窺っている。

（だから言ったのよ。家の者しか入らない所ならともかく、他人の目に触れるような場所にあの織物を置くべきではない、と）

カミラはここにはいない、伯母を恨めしく思った。

それを思ってもなんの解決にもならない。ともかくカミラは言葉を選んで、相手の興味を削がねばならなかった。

「申し訳ありませんが、そういった織物は、うちでは取り扱いがございません」

「そうなのですか？ この部屋の絨毯は、まさにその『よく似た織物』のようですが」
ベンジャミンが足元に視線を落とす。

応接間の絨毯は、毛足の長い贅沢なものだ。

客人を招き入れ、商売の話をするのに、みずぼらしいものでは体面が悪い。

だからここには良い絨毯を敷いているが、オルオポリス織りによくある特徴は含んではいない。

どういう意図でそう言い出したのか分からず訝しんでいるカミラに、ベンジャミンは視線を戻した。

「この赤は、オルオポリスとほとんど同じに見えます」

「……！」

ベンジャミンは、ほぼ断言していた。どうやってかは知らないが、現物を見たことがあるのではと、カミラがそう思うほどの口調だ。

分かりやすく動揺してしまったカミラは、ぎゅっと膝の上で手を握る。

カミラには、この御仁の相手は、荷が重い。

その実感はカミラの動揺をさらに激しいものにした。

「……申し訳ありません。こちらのものは、先代がどこから入手したもので、私も由来は存じ上げないのです」

微かに震えた声でカミラはそう告げたのだが、ベンジャミンの様子には変化は見られない。

「おや、そうなのですか」

「ええ。それに、かの織物についても、それに似たものについても、私にはなんのことか……」

「それは残念です」

言葉とは裏腹に、ベンジャミンは残念そうな態度も、執着するような素振りも見せなかった。

どう足掻いても、カミラではベンジャミンがどこの家の者かを聞き出すことはできなそうだ。それだけの場数の違いをカミラは感じる。

カミラがベンジャミンから目を逸らせずにいると、秘書が「失礼します」と断って、カミラに耳打ちをした。もちろんふりだけだ。こういう場を切り上げるための、よくある手段である。

ベンジャミンは不機嫌になることもなく、その様子を見ている。

カミラは秘書に頷いてみせてから、ベンジャミンに向いた。

「申し訳ありません。実は、このあと、他の商談がございまして」

暗にこれ以上は付き合わないというカミラの言葉に、ベンジャミンは「ああ」と呟いた。「それは仕方ありませんね。残念ですが、これで失礼致します」
「ええ」

ベンジャミンはさっと立ち上がった、一礼して去って行く。それを秘書が送っていった。カミラは、なんだったの、と思わずにいられなかったが、狼狽している場合ではない。テーブルに載った紅茶をぐいっと飲み干すと、カミラは使用人に急いで使いを出すように指示をした。「ワーゲンおじ様と、あとは伯母様にも。急いで来てくださいと伝えて」

「かしこまりました」
カミラが使用人共々慌ただしくしていると、秘書が戻ってきた。彼は眉間に皺を寄せて難しい顔をしているが、カミラも似たようなものだった。

「困ったわ。どこの誰かしら。かなり高位の家のように見えたけど」

「お見送りの際に馬車を見ましたが、見当が付きません。ああいった方は身の隠し方もご存じのようですね」

秘書の言葉に舌打ちをしたくなる思いで、カミラは顔を顰めた。

カミラはそこそこの商家の代表ではあるが、爵位のある身ではない。そんな彼女の立場では、通常関わりがないくらい地位の高い家ではないだろうかと感じたが、実際のところどうかは分か

らなかった。

それよりも、と焦った様子でカミラは秘書を振り返る。

「ばれていると思う？」

「どうでしょう、まだなんとも」

「用心に越したことはない、か」

カミラは視線を下げる。その先にあるのは、赤い絨毯だ。それはこの家を象徴するものと言っても過言ではない。

これは何よりの財産であるが、一方で何よりも厄介の種であることは間違いなかった。それを思っカミラの口からは、自然とため息が溢れる。

「ともかくおじ様達に相談するしかないわね」

だが、あの姦しい伯母がなんと言うだろうかと考えると、カミラは頭が痛くなってくる。

(おじ様達が揃う前に、途中の書類を仕上げて……いえ、それよりも、まずは手紙ね)

カミラは重い足取りで、一度部屋に戻った。